

## 第2章

# ザイール川河口地域のキャッサバ生産に 関する一考察—その伝播過程と商品化—

### はじめに—問題の所在

ザイール、コンゴ、中央アフリカ共和国などコンゴ盆地に位置する中部アフリカ諸国では、食糧作物としてのキャッサバの重要性がきわめて高い。食生活に関して言えば、例えばザイール全国平均で1人1日当たりのキャッサバの消費量は1キログラム以上に達し、それによる栄養摂取は総供給熱量の56%、タンパク質の22%を占めている<sup>(1)</sup>。さらに、近年における都市人口の増大とともに、都市でのキャッサバ需要が著しく拡大し、キャッサバは農民の現金稼得手段としても急速にその重要性を高めつつある。とりわけ本章で対象とするザイール川河口地域は、アフリカ大陸においてキャッサバが最初に伝来した地域のひとつであり、栄養摂取面におけるキャッサバへの依存度はアフリカで最も高い。さらに、この地域には300万人の人口を擁するキンシャサをはじめいくつかの大都市が存在し、その強い需要のためにキャッサバ生産は周辺農村部における最も重要な現金稼得手段のひとつとなっている<sup>(2)</sup>。すなわちこの地域では、基礎食糧キャッサバの商品化が急速かつ大規模に展開しているのである。

このようにザイール川河口地域において今日キャッサバはきわめて重要な作物だが、その起源は存外に新しい。キャッサバは元来新大陸原産の作物であり、この地への伝来は16世紀と考えられている。したがって、キャッサバ

はここ5世紀のうちにそれまでの基礎食糧に完全に代替し、さらに近年の商業的農業の展開に伴って地域経済にきわめて大きな影響を与える作物になったと言ってよい。以下本稿では、キャッサバという作物がこの地域の経済にいかなる重要性を持ったか、そしてその重要性の内容がどのように変化したのかを、植民地化以前の時期、植民地期、独立以降の時期について整理したい。この作業は、基本的にはこの地域の社会経済史的な理解に資することを第1の目的としているが、それ以外にも幾つかの問題を念頭に置いて行われている。

まず、キャッサバという作物に対する理解の深化である。アフリカにおいてキャッサバは非常に重要な作物であるにも拘らず、その研究(少なくとも社会科学的なアプローチによるもの)は現状ではきわめて不十分である。体系的な研究書としては未だにジョーンズ(William O. Jones)の著作を越える水準の研究は出現しておらず、またジョーンズがこの著作で取り上げた幾つかの誤解や偏見も今日なお存在する。キャッサバは栄養が不十分だ、土壌養分を著しく収奪する、あるいは栽培が簡単で農民が「怠け者」になる、といった主張は今日でもしばしば耳にするのである。本稿はキャッサバに関する農学的分析を加える場ではないのでこれらの問題を深くは論じないが、キャッサバが他の食糧作物に劣らぬ栄養分を持ち、また土壌養分の吸収度も他の作物と大差ないことは、すでにジョーンズがこの著作のなかで農学的分析を援用しつつ証明している<sup>(3)</sup>。また筆者は、キャッサバの栽培が農民を怠惰にするとも考えていない。その栽培を農家経営のなかでいかに位置づけるかについて、農民はそれぞれに工夫をこらしていると思われる。

社会科学的な立場から問題になるのは、キャッサバの受容とその生産拡大をどのように捉えるかという点である。最近のアフリカ農業研究においては、キャッサバ生産が近年急速に拡大しているとの報告がしばしば聞かれる。この現象に対しては、1970年代後半以降の経済危機による都市住民の所得低下のために安価なキャッサバが選好されるようになったという需要面からの説明の他に、生産面からの説明としてキャッサバ栽培の粗放性がよくあげら

れる。都市への男子労働力の流出と、食糧作物への需要増によって農村部では相対的に労働力が不足し、それが粗放的なキャッサバ生産への依存度を強める要因になっているとの主張である。<sup>(5)</sup> キャッサバ栽培に必要な労働投下量が他の作物に比べて相対的に少ないことは事実であろう。しかし、キャッサバの受容と生産拡大を説明するのに、その点のみを強調することは正しいのだろうか。さらに、キャッサバに関しては、それが植民地政府によって強制的に広められたとの一般的な理解も存在する。このようにキャッサバの受容についての従来の説明では、農民の自発的な選択というよりも、いわば（やむを得ずキャッサバの栽培に向かう）ネガティブな要因が強調されていたように思われる。<sup>(6)</sup> この地域のキャッサバ受容の歴史を植民地期以前に遡って検討することで、今日のキャッサバ生産拡大を新たな視角から考察できないだろうか。これも筆者が留意した点である。

最後に、ザイール川河口地域の社会経済史的な理解という点に戻れば、筆者の基本的な関心はキャッサバに強く依存したこの地域の食生活がいつ頃形成され、かつキャッサバを軸とした商業的農業がどの時期からどの程度の規模で進展し、その結果この地域の人々にとってのキャッサバの重要性がどのように変化したのかにある。以下では、さしあたりこの関心に従う形で論を進め、植民地期以前（16世紀～19世紀後半）、植民地期（1885年～1960年）、独立以降（1960年～）という3つの時期について、キャッサバの重要性を消費面（食生活の側面）と市場向け生産の側面（販売面）とから整理していきたい。なお、ザイール川河口地域と言った場合、その領域はコンゴ、ザイール、アンゴラの3カ国にまたがると考えられるが、本稿では資料上の制約から特に植民地期以降についてはザイールに関する記述にとどめる。

## 第1節 キャッサバの伝来と「農業革命」

### —植民地期以前のキャッサバ生産—

#### 1. コンゴ王国とキャッサバの受容

キャッサバの伝播過程には不明な点が多いが、正確なのはそれがポルトガル人によって1482年以降にザイール川河口付近に持ち込まれたことである。エンリケ航海王の下ポルトガルは15世紀にアフリカ大陸の南下を開始するが、ザイール川河口にはディオゴ・カンが1482年に到達する。当初ポルトガル人はこの地に産出する銅の獲得を目的に交易活動を行ったが、その後16世紀に入って新大陸で奴隷に対する需要が高まるにつれて交易の主眼は奴隷獲得へと変わり、大量の奴隷がこの地域から輸出されるようになる。そして新大陸との間で奴隷貿易に従事するポルトガル人が、交易品あるいは自らの食糧として、キャッサバをザイール川河口地域に持ち込んだのである。キャッサバの原産地はベネズエラと推測されており、カリブ海を中心とする低地熱帯地域の主要食糧作物であった。コロンブスをはじめ西インド諸島に上陸した際、島民はキャッサバを主食としていた<sup>(7)</sup>という。アメリカ大陸で奴隷制が展開する最初の段階、16世紀前半においては、主にカリブ海地域の鉱山開発および砂糖プランテーション向けに奴隷が供給されたことを考えれば、この交易ルートを通してキャッサバがザイール川河口地域に入ったと推定して大過ないであろう。

キャッサバがこの地に伝来し、主食としての地位を確立する以前の段階においては、人々は何を主食としていたのだろうか。この点についてヒルトン (Anne Hilton) は、コンゴ王国に関する著作のなかで、15世紀の主要な作物は「ヤム、豆類、および3種類の穀物」であったとしている<sup>(8)</sup>。「3種類の穀物」とは、ソルガム、トウジンビエ、および「ルコ」である。「ルコ」とはシ

コクビエを指すと推測されているが、その重要性は16世紀後半にコンゴ王国を訪問したピガフェッタ (Filippo Pigafetta) によっても指摘されている<sup>(10)</sup>。シコクビエの重要性に言及している記述は他にも散見され、もっと以前に伝播したヤムなどととも<sup>(11)</sup>にこの地域の基礎食糧として利用されていたと考えられる。総じて言えば、キャッサバ伝播以前のこの地域の食糧作物は、西アフリカのいわゆるサバンナ農耕で利用される作物群に類似したものであったと思われる。

さて、恐らくは16世紀に伝来したキャッサバがこの地域に与えた影響について、バランディエは括弧付きで「農業革命」という言葉を用いている<sup>(13)</sup>。西欧で生じたような土地利用様式の転換を伴う農業生産の革新ではないにせよ、確かにキャッサバ伝播によってこの地域の食糧作物は「革命的に変化した」と言える。重要なのは、かなり短期間のうちにキャッサバが主要食糧作物としての地位を獲得したことである。バランディエによれば、16世紀にはキャッサバに関する記述は見あたらないものの、1620年頃には「ザイール川河口の町ピンダ (Mpinda) で、ポルトガル人が長年にわたってブラジルの方法でキャッサバを栽培している」<sup>(14)</sup>との記述が見られる。また、コンゴ王国を構成するクランのひとつであるンサク (Nsaku) の伝承によれば、彼らの祖先は (1568年の) ヤカ人による攻撃でコンゴ王国の首都ンバンザ・コンゴ (Mbanza-Congo—サン・サルヴァドル [São Salvador] と呼ばれる。) を追われたが、その際キャッサバの茎を持ち出してこれを広めたという。勿論これは伝承に過ぎないのであるが、バランディエもキャッサバの伝播過程について、1570年代以降ポルトガル人居住地から普及したとの見解を述べている<sup>(15)</sup>。さらに、18世紀初めにザイール川河口に近いソニョ (Sonyo) 州に滞在したカプチン派のドゥ・リュック神父 (Father Laurent de Lucques) は、キャッサバの味を絶賛しているが、同時にその「根を砕き、乾かして作る粉」がルアンダ近くで大量に生産されていると記述している<sup>(17)</sup>。そして、同時期にザイール川河口付近右岸のカコンゴ (Kakongo) 王国に居住したフランス人伝道団は、キャッサバが「これらの部族の最も基礎的な食糧」である、と述べている<sup>(18)</sup>。

一方ヒルトンは、キャッサバが「17世紀半ばにはンピンダとンバンザ・ソニョとの間の森林部では主食であった」として、やはり16世紀から17世紀にかけて森林部を中心に急速に普及したことを示唆している<sup>(19)</sup>。こうした記述から、ザイル川河口地域におけるキャッサバの伝播については、それが特に16世紀後半以降急速に広まり、18世紀には既に主食としての地位を確立しつつあったと推論できる。

このように考えれば、キャッサバはザイル川河口地域に伝播した後、わずか200年前後のうちに主食となったことになる。どのような過程を経てこうした急速な伝播が可能となったのであろうか。この具体的な過程を示す史料はないが、いくつかの状況証拠を重ね合わせて考えてみよう。

まず、キャッサバの特徴として指摘できるのは、それが調理法とともに伝わらねばならないことである。多くの場合キャッサバは青酸を含有しており、この青酸部分を毒抜きしない限り食用とはならない<sup>(20)</sup>。ジョーンズが、西アフリカでキャッサバが最近まであまり普及しなかった理由について、それを持ち込んだポルトガル人との接触が少なかったために、毒抜きに関する知識が欠如していたためだとしているように<sup>(21)</sup>、キャッサバは単にイモがそこにあれば伝播するといった類のものではなく、調理法、なかんずく毒抜き法とともに伝えられる必要がある。したがって、外部世界からそれが伝播する場合には、外来者と土着の人々との間に調理法をも伝えるような密な関係が一定の期間存在しなければならないと考えられる。果たして、ポルトガル人とコンゴ王国との間には、こうした関係が構築されたのであろうか。

ポルトガル人のコンゴ王国における活動についてはヒルトンの著作に詳しい。キャッサバが急速に普及する16世紀、ポルトガル人のこの地域からの主たる輸出品は奴隷であった。しかし注意しなければならないのは、この奴隷交易が短期的にはポルトガル人とコンゴ王国との間に敵対的な関係を生まなかつたことである。第1図に16世紀から17世紀にかけての交易ルートを示すが、この時期奴隷はコンゴ国内で捕えられるのではなく、マココ(Makoko)、オカンゴ(Okango)などの奴隷市場を経由して王国の周辺地域から調達され



「現地の妾を持ち、深く根を張った」<sup>(24)</sup>のである。こうした関係を通じて、キャッサバが調理法とともにこの地域のアフリカ人へ伝わったと考えられる。

さて、ザイール川河口地域に急速に伝播したキャッサバは、いかなる栽培上の利点を有していたのだろうか。現在、キャッサバ栽培が普及する要因としては、必要投下労働量の少なさや需要の強さなどが主として指摘されている。しかし、植民地化以前の段階でキャッサバ栽培が急速に広まった原因は何だろうか。なぜ農民はキャッサバを選択したのだろうか。この疑問に対して、現在の筆者には十分説得的な答えが準備できていないが、いくつかの要因を考えることはできる。まず、ジョーンズが指摘するように、キャッサバは収穫の安定性をもたらした。キャッサバは通年で栽培でき、かつかなりの限界地でも生育する上に、<sup>(25)</sup>蝗害を始めとした天災に強い。これはそれ以前の主要食糧作物であるミレットが蝗害を被りやすいのと対照的である。サバンナとはいえ相対的に雨量の多いこの地域が、キャッサバの生育条件に合致していたことも重要であろう。

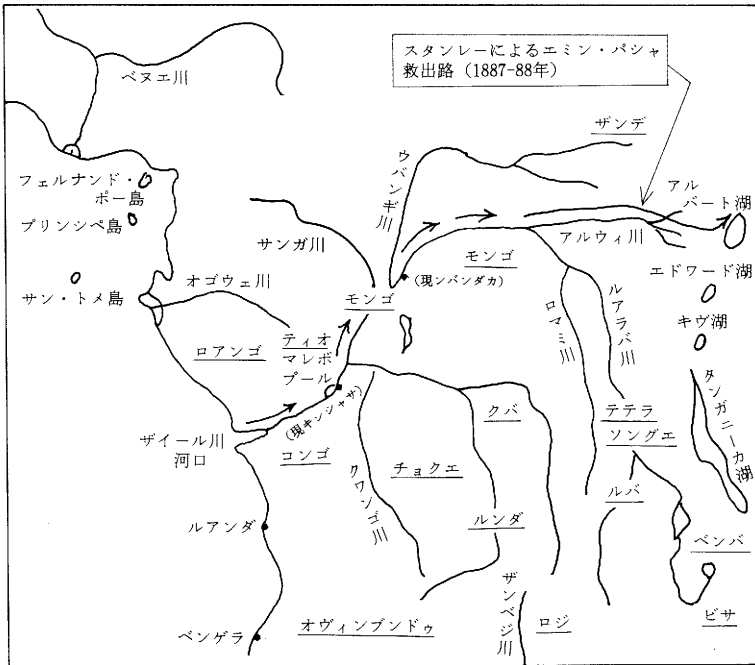
近年のキャッサバ普及の要因としてしばしば強調される必要投下労働量の問題についてはどうだろうか。筆者は、必要投下労働量が少ないというキャッサバ栽培の特質は、当時の急速なキャッサバ普及にあたってはそれほど重要な要因ではなかったと考えている。農業労働のほとんどが自給用食糧生産に向けられていた当時においては、1世帯当たりの農業生産量は現在に比べ少なかったと考えてよい。後述するように、現在ザイール川河口地域に位置するザイールのバンドゥドゥ州やバ・ザイール州では、農家のキャッサバ販売量は平均で生産量の4割から8割を占めている。商業的農業が発展する以前に比べて、現在では生産量そのものが大幅に増大していると言えよう。しかし、ザイール川河口地域の農民の農業技術水準は、全体としては、以前と比べそれほど大きく変化していない。農業機械化の進展が見られないのは勿論のこと、この地域では牛耕もほとんど導入されていないのである。また、化学肥料や有機肥料の利用も少なく、改良品種もあまり普及していない。したがって、生産量の増大は専ら農民の労働強化を通じて実現している



と考えられる。逆に、植民地化以前、商業的農業が発展する以前の段階においては、生産量が少なかった分労働時間は比較的短く、農業労働には相対的に余裕があったと言ってよい。<sup>(26)</sup> こうした状況下で、必要投下労働量の少なさを主たる原因としてキャッサバが選好されたとは考えにくい。

むしろ重要なのは生産力の問題であろう。ヒルトンはキャッサバやトウモロコシの導入によって土地生産性が著しく向上したと述べている。<sup>(27)</sup> しかし、残念ながらその根拠（例えばミレットなどと比べ年間、単位面積当たりの栄養摂取量に換算してどの程度の差があるのか）は示していない。この点に関しては現代の農学的な調査からもある程度類推が可能かもしれないが、現在筆者にはそれについて論じる準備がない。植民地化以前の段階でキャッサバがいかなる

第2図 19世紀後半の中部アフリカ



下線付は部族名を表わす。

(出所) Philip Curtin 他, *African History*, エイヴェン, Longman, 1978年, 420ページおよび, Byron Farwell, *The Man Who Presumed: A Biography of Henry M. Stanley*, 1957年 (川口政吉訳『ブーラ・マタリー探検家スタンレーの生涯』刀江書院, 1959年, から作成。

理由から農民に選択されたのかという問題については、今後も引き続き考えていきたい。

## 2. キャッサバの伝播と商品化

植民地化以前、すなわち19世紀末の段階で、ザイール川河口地域に伝来したキャッサバは地理的にどの程度普及していたのだろうか。この問いは、ザイール川河口地域におけるキャッサバ生産を扱う本章の課題からは若干ずれるが、アフリカ人農民のキャッサバ受容を考察する上できわめて重要である。ヨーロッパ植民地勢力がアフリカ人の生産活動に介入していないこの段階でのキャッサバ伝播は、基本的にアフリカ人農民による自発的な選択であったと考えられるからである。したがってここで、植民地化以前にキャッサバがどの程度広まっていたのかを若干整理しておきたい。

ザイール川河口地域を起点とする植民地化以前のキャッサバ伝播については、少なくとも2つの伝播経路を指摘することができる。第1にザイール川を遡行する北上ルート、第2にザンビア方面へ向かうサバンナ東進ルートである(第2図)<sup>(28)</sup>。

### (1) ザイール川北上ルート

植民地化以前におけるキャッサバの伝播は、この経路から著しく進んだ。これは、ザイール川流域の商業網を通じてキャッサバが広まったからである。19世紀の前半、コンゴおよびアンゴラからの奴隷供給が増加し、この時期の大西洋奴隷貿易の6割を占めるに至った。これにともなって、内陸部の奴隷(および象牙)と沿海部の塩あるいはヨーロッパ製品(特に銃、火薬、衣服)との交換を軸とした交易活動がザイール川流域で活発化する<sup>(29)</sup>。ザイール川は、マレボ・プールからキササンガニに至る約1800キロメートルの間に滝がなく、船舶の航行が可能である。この地域を中心としてモンゴ人による船を用いた交易が行われたのである。「上流からは木材、土器、魚の薫製、等が奴隷や象

牙とともに集められ、一方下流からはマニアンガ (Manianga) 鉱山で産出した銅や鉛、銅細工、肉の薫製、キャッサバその他の食糧が、ヨーロッパ製品とともにティオ (Tio) 人の市場を通して上流へ運ばれていった<sup>(30)</sup>との記述が示すように、キャッサバは商品としてザイール川を遡行していった。さらに、交易に携わったモンゴ人自身も交易商品とするためにキャッサバを栽培<sup>(31)</sup>していた。

このようにザイール川を往来するアフリカ人交易商人の活動範囲の広がり  
と軌を一にして、キャッサバが上流地域に伝播していったのである。19世紀  
後半、スタンレーがエミン・パシャ救出のためにアルウィ (Aruwi) 川沿いに  
アルバート (Albert) 湖方面に進んだ際にも、その付近ではキャッサバが広く  
栽培されていたことを考えれば、ザイール川交易活動に伴う19世紀のキャ  
ッサバ伝播はかなり急速であったと思われる。

## (2) サバンナ東進ルート

コンゴ王国から、現カサイ州西部のクバ王国、そしてその南東に位置する  
ルバ帝国へと伝播した経路を指す。ジョーンズはクバにおけるキャッサバの  
受容を次のように説明している。クバ王国の中核をなすブションゴ (Busho-  
ngo) 国の口頭伝承によれば、ブションゴは当初ミレット、バナナ、ヤムを食  
糧としていたが、シェマ・シュンガ (Shema Shunga) と呼ばれる女性が  
キャッサバと落花生を伝えた。キャッサバは当初野菜として扱われ、スライ  
スした後に煮込んで食された。その後、17世紀半ば、ボン・ボッシュ (Bom  
Bosh) 王の下でシクワングの作り方を学んだという。一方、シニー (Marga-  
ret Shinnie) は、17世紀に王位につきブションゴの国力を高めたシャンバ・ボ  
ロンゴ (Shamba Bolongongo) 王がポルトガル人のもたらした新しい作物  
を紹介したと述べている<sup>(35)</sup>。正確な時期は不明だが、コンゴ王国における  
キャッサバの受容からしばらく後に、クバ王国でもキャッサバが受容されたと  
考えられる。ただし、ジョーンズによれば、クバ王国では今世紀に至るま  
で、コンゴ王国ほどキャッサバへの依存度は高くなかった。

ジョーンズによれば、クバ王国の南東に位置するルバ帝国がキャッサバを受容したのは19世紀末のことである。ルバ帝国中心部の居住民は「ベナ・カルンドゥエ」(Bena Kalundwe)と呼ばれるが、これは「キャッサバの人々」という意味だ<sup>(36)</sup>という。ベナ・カルンドゥエの伝承によれば、1885年頃に時の首長タンボ・カノング(Tambo Kanonge)が飢饉への対応策としてキャッサバの植付けを命じた。人々はキャッサバが穀物の端境期でも収穫できることから大いにこれを評価し、帝国中心部の人々は「キャッサバの人々」と呼ばれるようになった。

以上が植民地期以前におけるサバンナ東進ルート<sup>(37)</sup>の事例である。この伝播経路がザイール川北上ルートと比較して興味深いのは、王国が存在したサバンナ地域ではキャッサバの受容が賢王による決定という形で認識されていることである。この点について現在の筆者にはこれ以上考察を深める準備がないが、キャッサバの伝播には地域の社会構造が何らかの形で影響を与えたと考えられる。

植民地期以前のキャッサバ伝播経路について説明してきたが、とりわけザイール川北上ルートに関連して明確となったのは、植民地化以前の段階でもキャッサバが商品化されており、当初はまさに交易商品として広まったことである。この時期のキャッサバの商品化を評価すれば、量的には少ないものの、商品化されたキャッサバが広範囲における伝播を促進したという意味で重要な意義を持ったといえよう。

## 第2節 商業的農業の局地的展開

### 一 植民地期におけるキャッサバ生産一

#### 1. 食生活におけるキャッサバ

再びザイール川河口流域に立ち戻ろう。本節では、植民地期(1885~1960

年)においてキャッサバがこの地域でどのような重要性を(生産面,消費面で)持っていたのか,またその重要性がこの期間にいかに変化したのか,あるいはしなかったのかを考察する。

植民地期において,キャッサバがこの地域の住民にとっての最も重要な食糧作物であったことは,様々な記述から確認できる。1950年代には,キャッサバはザイル全体で最も作付面積の大きい作物であった。<sup>(38)</sup>現在のバ・ザイル州およびバンドゥンドゥ州にほぼ相当するレオポルドヴィル州においても,第1表に示すとおりキャッサバの作付面積はトウモロコシや落花生を大きく上回っている。また,現在のバンドゥンドゥ州クウィル(Kwilu)準州の詳細な地理学的研究を1950年代に行ったニコライも,この地域の基礎食糧はキャッサバであると述べている。<sup>(39)</sup>一方,キャッサバ伝播以前の主食であったシコクビエの重要性はこの時期までに大きく減少した。第2表に主要作物の市場販売量推移を示すが,他の作物と比較してシコクビエの市場販売量はかなり少ない。もちろん自家消費分が存在するのであるが,シコクビエの用途のみが市場販売ではなく自家消費に片寄っていたと考える根拠は乏しく,生産それ自体が少なくなったと考えるのが自然だろう。

次に,キャッサバの重要性を栄養摂取の側面から検討しよう。植民地期には様々な理由から農村の栄養摂取状況に関する調査が行われており,数は少ないがザイル川河口地域に関するものも存在する。まず,現バ・ザイル州については,ドラシュソフ(Drachoussoff)らが1945年から翌年にかけて現カタラクト(Cataracte)準州内の農村調査を行っている。<sup>(40)</sup>これは,当時行政当局の関心事であった土壌侵食問題に対応するために,アフリカ人農業および農民の生活を総合的に調査したものだが,この中で農民の栄養摂取状況についても言及されている。当時のカタラクト郡バング(Bangu)郷内2カ村とインキン(Inkisi)郷内1カ村における栄養摂取源の調査結果を第3表に示す。これは調査者の観察,アフリカ人への質問,現地に精通した調査スタッフの報告に基づいて作成されたいわば見積もりであり,この表に基づいて主張しうることに自ずから限界があるが,農村の食生活におけるキャッサバ

第1表 レオポルドヴィル州のアフリカ人農業における主要作物の作付面積と収穫高 (1952年)

(単位：作付面積はヘクタール、収穫量はトン)

県名	キヤツサバ		落花生 (殻なし)		トウモロコシ		プランテン・バナナ	
	作付面積	収穫量	作付面積	収穫量	作付面積	収穫量	作付面積	収穫量
モワイヤン・コンゴ	18,114	209,931	6,498	2,294	9,170	4,437	381	2,706
バ・コンゴ	18,945	206,955	10,601	4,556	5,276	3,352	7,225	75,264
クワング	73,404	933,021	28,898	19,074	29,695	19,424	1,443	4,630
レオポルドII世湖	21,414	436,900	5,230	5,231	3,045	1,029	1,020	3,016
レオポルドヴィル州計	131,877	1,786,807	51,227	31,155	47,186	28,242	10,069	85,616

(注) (1)モワイヤン・コンゴ県に含まれる郡 (Territoire) はカサングル (Kasangulu), マディンバ (Madimba), バ・コンゴ県に含まれる郡はボマ (Boma), チェラ (Tshela), マタディ (Matadi), ルオジ (Luoji), ティスヴィル (Thysville), クワング県に含まれる郡はクイツ (Kikwit), イディオファ (Idiofa), グング (Gungu), カヘンバ (Kahemba), マジ・マニンバ (Masi-Manimba), フェシ (Feshi), ケンゲ (Kenge), カソング・ルンダ (Kasongo-Lunda), レオポルドII世湖県に含まれる郡はバニングヴィル (Banningville), イノンゴ (Inongo), キリ (Kir), ムンユ (Mushie), オンジュエ (Oshwe) である。

(2)原表にある計算の誤りは修正した。

(出所) Ministère des Colonies, *Aperçu sur l'économie agricole de la Province de Leopoldville*, ブリュッセル, 1955年, 35ページ, より作成。

第2表 レオポルドヴィル州のアフリカ人農業における主要作物の販売量  
(1932—54年)

(単位：トン)

年	キャッサバ	トモロコシ	落花生	シコクビエ	プランテン・ バナナ	パー ム ・ オイル	パー ム 核
1932	2,560	1,393	150	—	3,077	4,367	11,316
1933	3,578	2,557	150	—	3,796	3,046	12,108
1934	—	—	200	—	—	2,178	9,244
1935	—	—	2,341	—	—	3,352	17,278
1936	3,208	1,772	3,861	—	3,532	2,614	31,065
1937	3,086	1,618	5,012	—	4,356	3,454	22,096
1938	2,944	—	6,298	—	1,010	3,444	19,763
1939	2,772	2,556	6,401	60	3,244	4,357	19,202
1940	2,501	1,553	5,902	155	3,663	1,996	10,636
1941	984	1,137	3,403	218	4,774	2,193	6,595
1942	4,333	2,789	4,396	815	4,472	3,419	15,697
1943	6,358	3,929	3,841	1,278	7,821	1,708	14,915
1944	7,287	4,850	6,385	343	7,414	1,715	12,150
1945	4,902	4,729	6,050	1,474	927	816	12,959
1946	10,400	7,480	4,052	3,235	4,074	1,762	19,098
1947	6,505	12,094	5,350	4,363	3,749	3,321	21,067
1948	10,651	12,959	3,743	2,040	4,816	2,046	24,481
1949	25,425	16,690	3,370	1,417	14,563	11,634	20,894
1950	186,469	9,047	3,372	1,474	14,780	13,507	31,481
1951	222,469	10,895	3,446	1,958	19,211	13,086	26,495
1952	216,992	10,341	4,492	1,430	19,904	1,646	21,254
1953	208,833	13,996	6,498	837	24,981	2,923	25,011
1954	188,322	13,155	7,551	936	20,250	5,985	19,133

(出所) 第1表と同じ (36ページ)。

の重要性を示すためには十分であらう。<sup>(41)</sup> いずれの村でも総カロリー摂取量に占めるキャッサバからの摂取割合は5割から8割近くに及んでおり、キャッサバへの強い依存傾向が明らかである。

現バンドゥンドゥ州に関しては、植民地省の命を受け、1948年にアドリアンス (Adriaens) らが食生活の調査を行っている。<sup>(42)</sup> この報告でもキャッサバが最も基本的な食糧であると明言されており、<sup>(43)</sup> 部族ごとに1日当たりのキャッ

第3表 カタラクト郡農村部における熱供給源（1945年頃）  
（単位：キロカロリー）

食品名	供給熱量		
	バング郷農村No. 1	バング郷農村No. 2	インキシ郷農村
キャッサバ粉	368	736	920
シクワング	820	984	984
キャッサバ(イモ)	63	63	126
小計一①	1,251	1,783	2,030
バナナ	47	47	23.5
肉・魚	6	6	12
落花生	274	274	274
インゲン	684	171	34.2
パーム・オイル	180	180	135
トウモロコシ	73.8	73.8	73.8
米	—	69	—
総計一②	2,515.8	2,603.8	2,582.5
①/②(%)	49.7	68.5	78.6

(注) 供給熱量は、上記食品の1日当たりの摂取量を見積もり、その量に該当食品の単位当たり供給熱量を掛けることで推計されている。供給熱量の細かな数字が共通しているのは、見積もられた摂取量が一致しているためである。

(出所) Drashoussoff, V., "Essai sur l'agriculture indigène au Bas-Congo," *Bulletin agricole du Congo Belge* (以下BACBと略す), 第38巻第3, 4号, 1947年9月, 12月, 474~582ページ, および787~880ページ。545~546ページの表から作成。

サバ摂取量が調査されている。

この調査では、現バンドゥンドゥ州に居住する部族の中からバヤカ (Bayaka), バペレンデ (Bapelende)<sup>(44)</sup>, バソンデ (Basonde), バスク (Basuku), バンバラ (Bambala), バンベコ (Bambeko), バンカノ (Bankano) について、それぞれ数名から数十名の食事内容を聞き取り、それを平均して1日当たりのキャッサバ摂取量を求めている。具体的には、ペーストの摂取量が調査されている。ペーストとはキャッサバを杵でついて作られる食べ物であるが、ここではシクワングもペーストに含めている。第4表がその結果であるが、成人であれば、毎日2~3キログラムのペースト（キャッサバ粉に換算して800~1200グラム）を摂取していることがわかる。キャッサバの食事形態としては



第4表 現バンドゥンドン州内居住諸部族の成人1日当たりキャッサバ摂取量  
(単位：キログラム)

	バヤカバ	レンデ	バソンデ	バスク	バンバラ	バンベコ	バンカノ
ペースト換算	2.5~3	2~2.5	1.42	2	2以下	2.5~3	2.5~3
キャッサバ粉換算	1~1.2	0.8~1	0.57	0.8	0.8以下	1~1.2	1~1.2

(注) ペースト1kg作るのにキャッサバ粉が400g必要である。

(出所) E. -L. Adriaens, "Recherches sur l'alimentation des populations au Kwango," *BACB*, 第42巻第2, 3号, 1952年6月, 9月, 227~270ページ, 473~552ページ, 522~530ページから作成。

当然ペーストやシクワング以外の食べ方もあったはずであり、それをどのように扱っているかは不明だが、いずれにせよこの調査からもキャッサバに大きく依存した食生活であったことが理解できる。

ここまでに示したいくつかの調査からすでに明らかなように、少なくとも1940年代後半の段階においては、現在のバ・ザイール州およびバンドゥンドン州にあたる地域ではキャッサバが完全に主食としての地位を獲得し、栄養摂取の観点からもそれに大きく依存していた。

## 2. 植民地政策の影響

キャッサバの普及に関して、それが植民地期に政策的に広められたとする一般的な理解がある。次にこの見解の妥当性を検討しよう。ジョーンズも東南部アフリカでは植民地期においてキャッサバの政策的普及(救荒作物として)<sup>(45)</sup>がなされたことを強調している。ザイール川河口地域で植民地政策の結果として食生活が劇的に転換した事実はあるのだろうか。この問いに答えるためには、まずベルギー領コンゴにおける農業政策の概観から始めなければならない。

ベルギー領コンゴの農業政策が、アフリカ人農民を視野に入れ始めるのは1930年代以降である。それ以前にも農産物輸出の拡大は重要な政策課題であったが、その場合は生産局面にはあまり関心が向けられず、天然に存在する農産物をアフリカ人に採集させ、それを輸出するという方法が一般的で

あった。パームオイルや天然ゴムなど1930年代以前の主要な輸出向け農産物はいずれもこうした方法で収奪的に獲得されたものであった<sup>(46)</sup>。しかし、こうした方法では持続的に農業生産を拡大することはできない。ベルギー領コンゴでもそれまでの方法への反省が1920年代以降生まれ、生産局面に影響を及ぼす農業政策の必要性が認識されるようになる。この結果1930年代にベルギー領コンゴの農業政策は大きく転換し、アフリカ人農民の生産力向上が政策の重要課題となった。この新たな政策は一般に「ペイザナ (paysannat)」と呼ばれる<sup>(47)</sup>。

ペイザナに関する研究は十分に深化していないが、ペイザナとは端的に言って農業近代化政策である<sup>(48)</sup>。ペイザナ政策の主導者の一人であったアンリー (J. Henry) によれば、その本質は「非合理的に組織され、しばしば取り返しのつかない天然資源の破壊をもたらす粗放的農業を、土壌の生産力を持続的に確保しつつ徐々に集約的農業へと転換させること」にあつた<sup>(49)</sup>。このため、焼畑農業に依存し、耕地を恒常的に移動させるアフリカ人農民を入植させ、栽培作物や協同組合の創設を指導したり、機械化を推進するなどの農業近代化政策を行った。1936年、現在の東カサイ (Kasai Oriental) 州ガンダジカ (Gandajika) に最初の農民が入植した後、入植者数は急速に増大し、1951年には全国で50万人を越えた<sup>(50)</sup>。また、入植が行われない地域でも、アフリカ人農民に対する各種の農業普及事業が実施された。

このペイザナ政策は、ザイール川河口地域のキャッサバへの依存傾向に影響を与えたと言えるだろうか。例えば、ペイザナ政策の中でこの地域の農民にキャッサバ栽培が積極的に奨励された事実があつたのだろうか。筆者は以下の3点からこの見解に否定的である。

第1に、ペイザナ政策の力点がこの地域にはなかつたことである。ペイザナ政策は、農業・農村の近代化政策という側面を持つと同時に、先述したような輸出作物の開発という目的も担っていた。このため、この政策の枠内で綿花、コーヒー、ゴム、ココア、オイルパームなどのアフリカ人農民による栽培が奨励、指導された。とりわけ政策の中心は綿花であり、綿花栽培に適

したカサイ州 (Province du Kasai) や東部州 (Province Orientale) で大量の農民が入植した。一方、ザイル川河口地域であるレオポルドヴィル州においては、農民の入植は進まず、政策的影響としては協同組合の組織や宣伝・普及活動にとどまった。<sup>(51)</sup> 総じて、レオポルドヴィル州におけるペイザナ政策が農民の栽培作物選択に大きく影響したとは考えにくい。第2に、時期的な問題である。先述したように、この地域では1940年代半ばにおいてすでにキャッサバへの強い依存傾向が存在した。一方、ペイザナの開始は1936年であり、レオポルドヴィル州での開始時期は不明だが、いずれにせよ食生活の急激な変化を説明するためには期間が短すぎる。第3に、キャッサバに対する植民地当局の見方である。先にあげた現バンドゥン州での食生活調査においても、アフリカ人のキャッサバへの依存傾向は食生活の「原始性」あるいはその貧弱さを表すものとして理解されている。植民地当局者にとって、キャッサバは「望ましからざる作物」であったのである。こうした認識が支配するなか、この地域でキャッサバの政策的普及が積極的に行われたと考える根拠は乏しい。

問題はむしろ、ペイザナ政策以前にキャッサバに関する何らかの宣伝・普及活動があったかどうかであろう。この地域は、首都キンシャサ<sup>(52)</sup>に近い地域だけに何らかの指導、あるいは強制が加えられた可能性は否定できない。<sup>(53)</sup> この場合2つの方向性が考えられる。第1に、市場での販売を第1の目的とする作物の導入である。農業近代化政策の一環であり、ペイザナ政策とも共通の目的を持った指導である。これに関して言えば、レオポルドヴィル州での見地から普及、指導が行われた作物は主として米やコーヒー、オイルパームなどであり、キャッサバ生産が奨励されたとの記録は見られない。<sup>(54)</sup> この政策が新たな換金作物の導入という政策的指向性を持っていた以上、その時点ですでに広く栽培されていたと思われるキャッサバに目が向かないのは当然であろう。第2の方向性は、飢饉対策としての作付強制である。ベルギー領コンゴでは1917年以降強制栽培政策が行われ、具体的にはキャッサバ、米、ソルガム、トウモロコシ、バナナといった食糧作物、あるいはオイルパー

ム、綿花、ゴマ、キナ樹などがその対象となった。<sup>(55)</sup>これは、政策担当者からは、アフリカ人農業の発展を促進するため、あるいはアフリカ人を飢餓から救うためといった理由で正当化された。実際、特に後者の理由からキャッサバの作付が強制された可能性は大きい。しかしながら、これによってザイール川河口地域の食生活が変化したとは考えにくい。強制裁培の主たる対象は輸出向け換金作物であり、<sup>(56)</sup>レオポルドヴィル州でキャッサバの強制裁培が積極的に行われたことを示す資料も筆者は寡聞にして知らない。また、1917年から強力にキャッサバの強制裁培を進めた結果、1940年代に先にみたようなキャッサバ中心の食生活に変わったと考えるのは、常識的に無理であろう。

以上様々な事例をあげて検討してきたが、ザイール川河口地域のキャッサバに大きく依存した食生活の構造は、植民地期以前に形成されていたとみるのが自然ではないだろうか。この地域では、植民地化以前の段階で、すでにキャッサバはソコクビエなどに代わって基礎食糧の地位を獲得していたと考えられる。逆に言えば、この地域の農民は誰に強制されることもなく自発的にキャッサバを基礎食糧として選択したのである。食糧としてのキャッサバの重要性が植民地期以前にすでに確立されていたとすれば、農民にとってのキャッサバの重要性は植民地期の間なら変化しなかったのであろうか。筆者は、それとは逆に、キャッサバがザイール川河口地域の農民に対して持つ重要性がこの時期大きく変化したと考える。商品化の問題を通じてその点を検討してみよう。

### 3. 植民地期におけるキャッサバの商品化

キャッサバの重要性という意味で植民地期における最大の変化は、その商品化の進展である。第1節で述べたように、植民地期以前にもキャッサバの商品化はある程度見られてはいたが、植民地期とりわけ第2次大戦以降になるとそれが急速に進む。その点は第2表から明らかである。この表の細かい数字の信憑性はともかく、キャッサバの市場向け生産量が第2次大戦期以降

急激に増大したという趨勢は確かであろう。これは、ベルギー領コンゴ経済の拡大と、首都キンシャサの人口増に対応したものであった。

ベルギー領コンゴは植民地末期にはブラックアフリカ有数の工業国であり、南アフリカを除けばジンバブエ（当時南ローデシア）に次ぐ工業化率（製造業生産高/GDP）を誇っていた<sup>(57)</sup>。この製造業の成長は第2次大戦後に生じたものであり、それ以前から経済の牽引力であった鉱業部門と合わせ、戦後の短期間に急速な経済成長をもたらした<sup>(58)</sup>。この過程は首都人口の急増を伴って進み、1945年に10万人程度であったキンシャサの人口は独立直前の59年には40万人強に達した<sup>(59)</sup>。このうちヨーロッパ人人口は2万人程度と推測できるから<sup>(60)</sup>、首都のアフリカ人人口はわずか15年足らずのうちに4倍に増えたことになる。また、この時期キンシャサに流入したアフリカ人は主として現在のバ・ザイール州出身者（特にカタラクト地方）であった<sup>(61)</sup>。第3表に示したカタラクト郡農村の栄養調査からも明らかのように、彼らの主食はキャッサバである。この時期キンシャサに居住するアフリカ人人口の増大に呼応して、そこでのキャッサバの需要量も急増していたのである。第2表の数値は、1949年から50年にかけて一挙に7倍以上に増えるなど疑わしい部分もあるが、にもかかわらずこの時期ベルギー領コンゴ全体で都市に居住するアフリカ人人口が増大し、それに歩調を合わせてキャッサバの市場販売量も大幅に増加したことは確かである。

それでは、急増するキンシャサのキャッサバ需要は、どの地域からの供給によって満たされていたのだろうか。植民地期においては、現在のバ・ザイール州、とりわけカタラクト地方がキャッサバの主たる供給源であった。

第5表にカタラクト県の中心であるティスヴィル郡の食糧生産と商品化率を示す。この統計についても厳密な議論は困難だが、一見して明らかなのはいずれの食糧作物も商品化率がかなり高いことである。キャッサバも生産量の半分が販売に回されている。これ以外にも、植民地期のカタラクト県に関しては、この地域がキンシャサに対する食糧供給地域であり、アフリカ人農民が食糧販売によって高い所得を得ているといった記述がしばしば見られ

第5表 ティスヴィル郡におけるアフリカ人農業生産と商品化率（1956年）

（単位：トン）

農産物	生産量	販売量	商品化率 (販売量/生産量)
キャッサバ	106,920	54,960	51.4%
落花生	2,724	1,120	41.1%
インゲン	2,556	1,810	70.8%
生食用バナナ	2,150	1,994	92.7%
プランテン・バナナ	1,650	725	43.9%
サトウキビ	1,710	90	5.3%
トウモロコシ	1,579	342	21.7%
トマト	820	788	96.1%

（出所）L. Baeck, "Une société rurale en transition: Étude socio-économique de la Thysville," *Zaire*, 第11巻第2号, 1957年2月, 115~186ページ。144ページ, 第8表から作成。

(62) なる。カタラクト県で食糧作物の商品化が進んだ原因は、キンシャサ市場へのアクセスの優位性に求められる。単なる地理的隣接性以上に、この地域には1898年にキンシャサと港湾都市マタディを結ぶ鉄道が開通し、鉄道沿線に平行して舗装道路も存在していた。これはこの地域の地理的状況と関係がある。ザイル川は、キンシャサより上流はキサングニまでの区間大型船舶が航行可能であるのに対し、それより下流のカタラクト県を通る流域は川筋が細くなり、幾つもの滝が存在するために船舶が利用できない。<sup>(63)</sup>したがって、キンシャサに集められた輸産品を港まで搬出し、またそこに物資を送るために、カタラクト地方の輸送手段の整備が植民地初期の最重要課題となり、鉄道や道路の建設が進んだのである。食糧作物はこれらの輸送手段を利用してキンシャサに運ばれた。どの程度の輸送量があったのかについての資料はほとんどないが、目安のために第6表をあげておく。これを引用したバエク<sup>(64)</sup> (L. Baeck) の論文には、調査対象時期が明記されておらず、この表もその意味できわめて不完全であるが、これによって1950年代にティスヴィル郡内の鉄道駅から多様な食糧が出荷されていたことが理解できよう。<sup>(65)</sup>

一方、キンシャサの東側の隣接地域であるバンドゥンドン州では、キャッサバの商品化は進展したであろうか。ニコライはやはり1950年代に現在のバ

第6表 ティスヴィル郡内鉄道駅からの食糧輸送

(単位：袋)

駅名	クウィル	マランガ	キンベセ	ルカラ	トゥンバ	モエルベケ	カティエ	コロ
キャッサバ	149,024	155,941	337,428	197,670	457,881	603,837	55,370	180,999
(うちシクワング)	138,744	10,015	66,519	21,650	366,615	421,575	28,249	7,426
バナナ	1,135	1,927	274	762	71	632,103	—	180
インゲン	7,042	34,937	57,143	5,655	331	745,695	102	13,371
牛(生体)	—	155,580	—	15,350	—	—	—	155,320
落花生	12,636	17,682	98,106	14,396	2,786	367,766	7,251	1,994
トマト	808	65	12,645	1,210	255	161	—	102
魚	30	112	—	268	379	—	—	67,008
駅名	ドゥテュー	キアシ	キアシ/col.	マルシアル	アルディ	ティスヴィル	ブロック	15駅合計
キャッサバ	758,061	127,243	175,896	1,886,356	14,929	2,642,900	370,575	8,114,110
(うちシクワング)	460,610	118,354	105,482	1,096,759	905	1,517,356	151,984	4,512,243
バナナ	1,067,090	918,732	1,138,309	341,980	117	1,273,342	—	5,376,022
インゲン	101,698	160	22,559	3,046	61	41,116	67	1,032,983
牛(生体)	410,245	—	—	—	—	—	73,708	810,203
落花生	134,241	14,345	51,497	6,840	—	10,282	832	740,654
トマト	44,795	51,753	108,416	162,156	374	94,782	1,774	479,296
魚	2,040	—	5,667	—	—	127,597	—	203,101

(注) (1)原表には、これ以外にも多数の食糧について輸送量が記されているが、ここでは輸送量の多い順に7品目をあげた。  
 (2)手荷物としての運搬はこの統計に含まれない。  
 (出所) 第5表と同じ(142ページ、第Ⅴ表から作成)。

ンドゥンドゥ州クウィル準州内の農村を調査しているが、その状況はカタラクト地方とは異なっている。ニコライはしばしばこの地域の食糧作物販売量がわずかであると述べている。<sup>(66)</sup>クウィルにおける主たる食糧販売先はククウィット (Kikwit) やリーヴァヴィル (Leverville) であり、キンシャサに比べれば人口も少ない上に、そこに至る輸送網も整備されていない。植民地期バンドゥンドゥ州には、鉄道も長距離の舗装道路も存在しなかった。さらに、比較的都市部に近いクウィルにおける農民の主たる現金稼得源は、ニコライが強調するように採集したオイルパームの販売であり、<sup>(67)</sup> キャッサバなど食糧作物の販売が重要視されるのはむしろオイルパームが存在せず、土壌条件の悪い南部台地地域 (現在のクワンゴ [Kwango] 準州) であった。しかしその地域になると、市場アクセスの条件が悪く、食糧作物を大量に販売することは不可能になる。バンドゥンドゥ州では植民地期にはキンシャサへのアクセスの条件が悪く、さらに条件が相対的に良好な地域では主要な現金稼得源がオイルパームであったために、キャッサバの商品化の度合いは総じてカタラクト県ほど高くなかったと考えられる。

植民地化以前はザイル川交易その他の伝統的な交易ルートで取引されたキャッサバであったが、植民地期になると都市の拡大に呼応して都市向けの流通が急速に増加する。ザイル川河口地域においては、カタラクト地方からキンシャサへという、従来の伝統的取引とは質的に異なるキャッサバの流通経路が出現し、見るまにその重要性を増していったのである。新しい流通網はキンシャサの西部隣接地域で急速に発展するが、この時点では東部隣接地域 (現バンドゥンドゥ州) での展開はまだ萌芽の段階であった。キンシャサの東部地域がこの流通網に本格的に取り込まれるのは独立以降のことである。



### 第3節 市場向けキャッサバ生産の全面的展開

#### —独立以降—

キャッサバは植民地期以前の段階でザイール川河口地域農民の最も重要な基礎食糧であったが、植民地期にはキンジャサをはじめとする都市居住者の基礎食糧としての需要が高まり、とりわけカタラクト地方においてその市場向け生産が活発化したことを前節までに述べた。市場向け生産の活発化という事実を農民側から見れば、キャッサバが重要な現金稼得源として立ち現れてきたことを意味する。本節でも、消費面すなわち食生活にとってのキャッサバの重要性と、販売面すなわち農民の現金稼得源としてのキャッサバの重要性、という2つの側面から独立以降の状況を検討したい。

#### 1. 消費面におけるキャッサバの重要性

ザイール川河口地域に居住するアフリカ人の基礎食糧として、植民地期以前にキャッサバはすでに重要な位置を占めていた。ここでは、独立以降の資料を検討し、その位置に変化があったのか、あるいはなかったのかを考察したい。独立以降についても、この地域の栄養摂取状況に関していくつかの調査が行われている。

バ・ザイール州の栄養摂取状況については、1983年から84年にかけて500世帯を対象とした調査が実施されている<sup>(68)</sup>。第7表は、摂取した作物が3大栄養素の主としていずれを供給するのかに応じて分類し、作物ごとの栄養供給の割合を推計したものである。ここでキャッサバ（キャッサバおよびキャッサバの葉）は炭水化物の60.11%、全栄養量との関係でも約4割を供給しており<sup>(69)</sup>、州全体で見てもやはりキャッサバへの依存度がかなり高いことがわかる。

ただしこの調査を準州別に見ると、かなり地域的差異が存在する。第8表

第7表 バ・ザール州における栄養摂取構造 (1983-84年)

I. 主として炭水化物を含む食糧	66.1%
キャッサバ (粉, シクワング, イモ)	53.52
キャッサバの葉	6.59
米	14.77
パン	6.77
ヤムイモ	5.04
砂糖	3.30
プランテン・バナナ	3.23
タロイモ	2.80
トウモロコシ	1.75
その他	2.23
	(100%)
II. 主として脂質を含む食糧	22.4%
パーム・オイル	62.16
パーム核	28.10
落花生	9.04
アヴォガド	0.70
	(100%)
III. 主としてタンパク質を含む食糧	11.5%
インゲン豆	40.85
魚 (生, 塩漬け, 薫製)	32.64
大豆	7.79
豚肉	5.04
牛肉	2.87
鶏肉	1.68
その他	9.13
	(100%)
	総計100%

(出所) Mouvement Populaire de la Révolution, République du Zaïre, Département de l'Agriculture et du Développement Rural, *Région du Bas-Zaïre: Etude régionale pour la planification agricole*, キンジャサ, 1986年, 50ページより作成。

は、バ・ザール州の準州および都市ごとに炭水化物摂取作物の内訳を示している。一見して明らかなのは、米に対する依存度にかなり差があることである。都市部およびバ・フルーヴ (Bas-Fleuve) 準州では、炭水化物供給源としての米の役割が重要であり、また都市部では炭水化物供給源としてパンも

第8表 バ・ザイール州における1世帯当たりの熱量摂取構造：主として炭水化物を含む食物の内訳（1983-84年）  
（単位：1日当たりキログラム）

食物の種類	都市部			農村部			バ・ザイール州合計	
	マタデイ 供給熱量 %	ポマ 供給熱量 %	パ、フルーグ 供給熱量 %	カタラクト 供給熱量 %	ルカヤ 供給熱量 %	供給熱量	%	
トウモロコシ	379 3.5	31 0.6	10 0.1	54 0.7	24 0.3	146	1.8	
米	1,915 17.6	1,479 27.9	1,647 20.7	32 0.4	395 5.6	1,230	14.9	
パン	906 8.4	474 8.9	549 6.9	414 5.2	134 1.9	564	6.8	
総計	3,200 29.5	1,984 37.4	2,206 27.7	500 6.3	553 7.8	1,940	23.5	
キャッサバ	5,500 50.7	1,937 36.6	1,394 17.5	6,893 87.9	5,567 79.0	4,465	54.1	
うちイモ	—	349 6.6	393 4.9	—	—	124	1.5	
キャッサバ粉	4,810 44.3	547 10.3	127 1.6	6,150 77.6	4,497 63.8	3,490	42.3	
ジャワング	690 6.4	1,041 19.6	874 11.0	743 9.4	1,070 15.2	851	10.3	
プランテン・バナナ	—	518 9.8	1,065 13.4	30 0.4	—	269	3.3	
ヤムイモ	497 4.6	121 2.3	1,354 17.0	24 0.3	28 0.4	420	5.1	
タロイモ	—	162 3.1	1,234 15.5	—	—	233	2.8	
その他	81 0.7	144 2.7	—	37 0.5	20 0.3	61	0.7	
根莖類・バナナ類計	6,078 56.0	2,882 54.4	5,047 63.4	6,984 89.1	5,615 79.7	5,448	66.0	
キャッサバの葉	908 8.4	318 6.0	452 5.7	257 3.2	448 6.4	549	6.7	
トマト	—	1 0.0	—	9 0.1	31 0.4	7	0.1	
その他	238 2.2	41 0.8	4 0.0	—	—	7	0.1	
野菜類計	1,146 10.6	360 6.8	456 5.7	266 3.3	479 6.8	563	6.9	
マンゴー	—	36 0.7	—	20 0.2	0 0.0	9	0.1	
砂糖	409 3.8	37 0.7	253 3.2	150 1.9	389 5.5	278	3.4	
他の果実	22 0.2	—	—	8 0.1	15 0.2	10	0.1	
その他計	431 4.0	73 1.4	253 3.2	178 2.2	404 5.7	297	3.6	
総計	10,855 100.1	5,299 100.0	7,962 100.0	7,928 100.9	7,051 100.0	8,248	100.0	

(注) 原表には300世帯の総熱量が記載されており、それを調査世帯数で除して1世帯当たりの数値を求めている。  
(出所) 第7表と同じ(47ページ, I. 18a表から作成)。

第9表 キンシャサにおける基礎食糧の消費。月1人当たり平均消費量および支出額（1969, 1975, 1986年）  
 （単位：消費量はキログラム，支出額はザイール）

	1969年		1975年		1986年		消費量の比 75年/86年	支出額の比 75年/86年
	消費量	支出額	消費量	支出額	消費量	支出額		
キヤッサバ	6.120	642	5.379	647	4.599	427	0.85	0.73
うち、イモ状態	(0.909)	(—)	(0.233)	(—)	(0.064)	(—)		
コセット	(4.174)	(484)	(4.049)	(535)	(4.292)	(396)		
シクワング	(1.037)	(91)	(1.097)	(112)	(0.243)	(31)		
パン	1.770	457	1.172	339	1.575	156	1.34	0.34
米	0.607	168	0.738	218	1.067	168	1.44	0.53
プランテン・バナナ	0.374	20	0.321	24	0.437	40	1.36	1.22
トウモロコシ	0.267	45	0.222	44	0.308	41	1.38	0.66
計	9.138	1,332	7.832	1,272	7.986	814	1.01	0.64

(注) (1) 「イモ状態」とは、特に他の形態に加工せず、そのままふかすなどして食することを意味する。

「イモ状態」の支出額については調査されていない。

(2) 「コセット」とはキヤッサバの皮を剥き乾燥させたものを指す。この統計では、「コセット」にキヤッサバ粉も含めている。

(3) 支出額はインフレ率をデフレートした数値である。

(4) 本表では、キヤッサバの月1人当たり消費量が5キログラム弱から6キログラム強と、かなり少なくて計上されている。本表は元々Houyouxの調査から引用されており、その調査方法については原典を入手できなかつたために不明だが、ここで計上されているキヤッサバの消費量はすべてキヤッサバ粉の重量に換算されている可能性が高い。

(出所) Mouvement Populaire de la Révolution. République du Zaïre, Département de l'Agriculture, *Analyse des prix des produits vivriers à Kinshasa pendant la période 1961-1989* (publication 12), キンシャサ, 1989年, 18~19ページ, 第5表および第6表から作成。

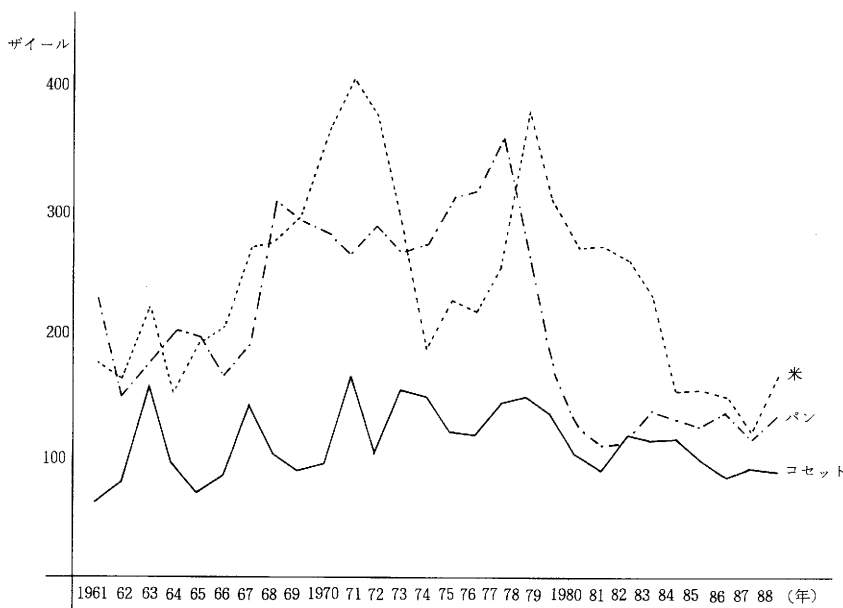
重要となっている。その一方で、カタラクト準州やルカヤ（Lukaya）準州ではキャッサバへの依存度がきわめて高く、それぞれ炭水化物供給総量の8割前後を占めている。この差異をどのように解釈するべきだろうか。

まず、都市部における栄養摂取状態に関する調査に関しては、直接バ・ザイール州の都市部を扱ったものはないが、キンシャサの食生活に関して調査がなされている。常識的に考えて、キンシャサの食生活とマタディ、ボマのそれとの間に大きな相違はないであろう。第9表に1969年、75年、86年のキンシャサにおける基礎食糧の月当たり平均消費量、および出費額（インフレ率でデフレートした実質購入額）を示す。キャッサバの消費量がやはり群を抜いて高いが、同時にパンの消費量がそれに次ぎ、また米の消費量が年を追って高まっていることがわかる。都市部では炭水化物摂取源としてパンと米の重要性が増しつつあったのである。これらの食糧の消費量がなぜ独立後に都市部で増加したのか。それに対する答えとして味覚以上に重要なのは、価格の問題である。

第9表の1975年と86年の消費量の比と支出額の比とをくらべれば、この期間にキャッサバの価格も低下しているが、それ以上に米とパンの価格低下が相対的に著しいことがわかる。キャッサバ、米およびパンのキンシャサ市場における実質価格の推移を示した第3図を見れば、この点はさらに明瞭となる。1970年代後半以降、キャッサバの一般的な取引形態であるコセットの価格はあまり変化していないのに対し、米とパンの実質価格は輸入自由化政策の影響から急激に低下し、80年代後半には米やパンの価格がコセットの価格にかなり接近している。第10表に示すように、ザイールの米および小麦の輸入量は近年かなり増加しているが、安価な輸入食糧品が大量に供給されたために、都市部の食生活はパンや米の消費を高めるという形で変貌を遂げたのである。

輸入食糧の浸透は都市部のみに限らなかった。トレンス（Eric F. Tollens）等の調査によれば、1980年代後半には農村部にも輸入米がかなりの程度浸透していた。第11表に、1988年10月から89年9月にかけてのバ・ザイール州に

第3図 キンシャサ小売市場における米、パン、コセット<sup>1)</sup>の1キログラム当たり実質価格<sup>2)</sup>推移 (1961-88年)



(注) 1) コセットとはキャッサバを乾燥させたものであり、多くの場合キャッサバはこの形態で取引される。

2) 実質価格は1988年価格を基準とし、消費者物価指数で各年の価格を実質化して求めた。

(出所) République du Zaire, Département de l'Agriculture, *Analyse des prix des produits vivriers à Kinshasa pendant la période 1961-1989* (Publication 12), キンシャサ, 1989年, Annexe 1より作成。

における主要な食糧作物の純販売額（販売額－購入額）を示す。キャッサバの販売額が総販売額の圧倒的な割合を占めていることに加え、米の純販売額がいずれの準州でもマイナスになっていることがわかる。すなわち、農村地域でも米の購入量が販売量を上回っているのである。そして第12表が示すように、バ・ザイール州の世帯が購入するこれらの米は、都市部においてはほぼそのすべてが、農村部においてもその大部分が輸入米であった。

いずれにせよ、ここまでの議論で明らかのように、独立以降米や小麦を初めとする輸入食糧の重要性が増し、都市部を中心に食生活の変化をもたらした

第10表 ザイールの米および小麦輸入量 (1979-88年)

(単位：トン)

年	米	小麦
1979	14,000	120,000
1980	10,000	103,000
1981	200	157,000
1982	37,000	178,000
1983	32,000	144,000
1984	37,000	225,000
1985	40,000	209,000
1986	60,000	301,000
1987	70,000	279,000
1988	70,000	—

(出所) 第9表に同じ (16ページ)。

第11表 バ・ザイール州における主要作物の純販売額 (販売額-購入額)

(1988年10月~89年9月)

(単位：ザイール)

作物	準 州 名			バ・ザイール州 平均
	バ・フルーヴ	カタラクト	ルカヤ	
キャッサバ	44,322	108,493	48,163	69,738
トウモロコシ	2,547	1,707	5,518	3,269
落花生	2,502	13,778	13,567	9,618
米	-14,328	-4,696	-1,458	-9,592
インゲン	-7,019	2,059	2,915	-2,644
バナナ	9,545	12,892	1,142	9,472
キャッサバの葉	1,358	555	1,114	1,594
計	38,927	134,788	70,961	81,455

(注) (1)上記販売額はインフレ率をデフレートしたものである。

(2)原表にある計算上の誤りは修正した。

(出所) Katholieke Universiteit Leuven, *Le revenu agricole de l'agriculture traditionnelle dans la région du Bas-Zaïre pendant la période octobre 1988-septembre 1989* (Publication 21), ルーヴェン, 1991年, 12ページ, 第8表。

第12表 バ・ザイル州の米購入世帯が主として購入する米（1989年）

（％）

	準 州 名				州平均
	バ・フルーヴ	カタラクト	ルカヤ	都市部	
輸 入 米	74.1	74.4	59.0	97.1	72.7
地 場 米	22.7	26.9	21.4	4.3	22.7

（注） この調査は、米を日常的に購入するバ・ザイル州の世帯に対して、購入する米が輸入米か地場米かを尋ねたものである。

（出所） Mouvement Populaire de la Révolution, République du Zaïre, Département de l'Agriculture, *Aspects généraux de l'agriculture, dans la région du Bas-Zaïre* (Publication 15), キンシャサ, 1990年, 28ページ, 第17表。

た。基礎食糧としてのキャッサバの重要性に基本的な変化はないものの、上記の変化の過程でそれに対する栄養摂取上の依存度は相対的に低下したと考えられる。ただし繰り返すが、キャッサバに対する依存度の低下はこの地域における農業生産の多様化によるものではなく、安価な輸入食糧の流入を原因としていた。この地域の食糧供給構造は基本的にはなんら変化しておらず、安価で大量のパンおよび米の輸入という条件が満たされなければ、すぐさま以前のキャッサバ一辺倒とも言える栄養摂取構造に戻らざるを得ない。実際、1980年代末以降は経済危機が極度に深刻化し、穀物輸入のための外貨が不足しつつあったことに加え、91年9月にはアメリカが対ザイル向けの援助停止を宣言し、PL480による安価な食糧調達ができなくなったため、<sup>(71)</sup>今後しばらくは再びキャッサバへの依存が強まることになる。

## 2. 販売面におけるキャッサバの重要性

独立以降、特に都市住民の間で米やパンの消費が高まったことにより、ザイル川河口地域におけるキャッサバへの栄養摂取面（消費面）での依存度は相対的に低下したが、これに対して販売面におけるキャッサバの重要性は逆にこの時期大きく高まった。その最大の要因は、キンシャサをはじめとする都市人口の増大である。キンシャサだけを見ても、独立時の人口は約40



万人程度であったのに対し、1984年の段階で265万人。現在はおそらく300万人を超えているであろう。単純に考えても、ザイール川河口地域のキャッサバに対する需要はこの30年間に7倍程度(300万÷40万=7.5)に増えたことになる。これは、農村地域の人口増加率を大幅に上回る数字であり、個々の農家にとってもキャッサバの販売量は大きく増加したと推測できる。<sup>(72)</sup>

個々の農家レベルで、キャッサバ販売は実際どの程度の重要性を持っているのだろうか。1980年代後半の調査結果を第13表および第14表に示す。これは、バ・ザイール州およびバンドゥンドンゥ州の農家について、キャッサバの生産量、販売量、購入量を調査し、生産量から販売量と購入量との差を差し引いて(バンドゥンドンゥ州では損耗量も推計されており、その場合はこれも生産量から差し引かれる)自家消費量を推計したものである。これは、それぞれ1000世帯を超えるサンプルの平均であり、当然ながら個々の農家の多様性は消去されている。しかし、アフリカの多くの地域と同様に、この地域でも農村内の階層分化は相対的に進んでおらず、農家の経営にある程度の類似性が認められると考えられるから、この表からこの地域の平均的な農家像を考察することは可能である。

第13表 バ・ザイール州におけるキャッサバの用途(1世帯平均、イモ重量換算、1988年10月～89年9月)

(単位：キログラム)

	準 州 名				バ・ザイール 州 平均
	バ・フルーヴ	カタラクト	ルカヤ	都市部	
生産量	5,007	6,427	4,591	2,353	5,310
自家消費量	3,367	1,714	3,657	1,323	2,675
純販売量	1,640	4,713	934	1,031	2,656
販売量	1,766	4,956	1,360	1,459	2,912
購入量	126	243	426	428	256
販売量/生産量(%)	35.3	77.1	29.6	62.0	54.8

(注) イモ重量換算の方法については第6章を参照のこと。

(出所) Katholieke Universiteit Leuven, *Les quantités commercialisées des produits vivriers dans la région du Bas-Zaire pendant la période octobre 1988-septembre 1988* (Publication 23), ルーヴェン, 1991年, 6ページ, 第2表より作成。

第14表 バンドゥンドゥ州におけるキャッサバの用途（1世帯平均、イモ換算重量、1987年10月～88年9月）

（単位：キログラム）

	準 州 名					バンドゥ ンドゥ 州平均
	クワンゴ	クウィル	マイ・ ンドンベ	バンドゥ ンドゥ	キクイット	
生産量	6,101	8,124	9,234	4,946	4,916	7,859
損耗量	523	455	776	108	99	540
自家消費量	3,427	3,857	5,034	3,529	3,440	4,004
純販売量	2,131	3,812	3,424	1,309	1,377	3,315
販売量	2,404	4,165	3,694	2,072	3,145	3,649
購入量	273	353	270	763	1,768	334
販売量/生産量(%)	39.4	51.3	40.0	41.9	64.0	46.4

(注)(1) 重量換算の方法については第6章を参照のこと。

(2) バンドゥンドゥとキクイットは都市部である。

(出所) Mouvement Populaire de la Révolution, République du Zaïre, Département de l'Agriculture, *Analyse des quantités produites et commercialisées du manioc dans la région du Bandundu* (Publication 10), キンシャサ, 1989年, 15ページ, 第9表より作成。

この表から次の2点を指摘できる。第1に、バンドゥンドゥ州の農家においてもバ・ザイル州に劣らずキャッサバ販売が活発化していることである。先述したように、植民地期においてはキャッサバの市場向け生産は主としてカタラクト地方で活発化していたが、バンドゥンドゥ州ではあまり重要ではなかった。しかし、1980年代後半になると、バンドゥンドゥ州では個々の農家レベルで量的にも、総生産量に占める販売量の割合で見ても、バ・ザイル州の農家に比肩するキャッサバ販売を行うに至っている。この事実を、基本的にはキンシャサにおけるキャッサバ需要の増加に対応して供給地域が広がった結果であると解釈できるが、その契機のひとつは市場アクセスの改善である。植民地期には、バンドゥンドゥ州とキンシャサとを結ぶ舗装道路は存在しなかったが、1970年代後半になってこれが完成し、キンシャサとクウィットの間をつないだ。これによって、とりわけクウィル準州の対キンシャサ市場向け生産が活発化したと考えられる。実際、1974年と1984年とを比較すれば、バンドゥンドゥ州から出荷されたキャッサバのキンシャサ市場

におけるシェアは50%から70%に増加したと言われる。<sup>(73)</sup>

その点に関連して2番目に指摘したいのは、カタラクト準州におけるキャッサバ商品化のさらなる進展である。1950年代にもこの地域では生産量の半分が販売に向けられていたとの報告はすでに紹介したが、80年代後半には販売量の割合は生産量の8割近くに達している。これは他の準州に比較しても突出した高率である。カタラクト準州においてキャッサバは、自給生産の延長で販売されるというよりは、むしろ販売そのものを目的として栽培されていると言えるだろう。<sup>(74)</sup>

ザイール川河口地域のキャッサバ生産に関して、独立以降の最も重要な変化は市場向け生産の拡大、深化であった。すなわち、カタラクト地方以外にキンシャサへのキャッサバ供給地帯が地理的に拡大したと同時に、先進地帯であるカタラクトでも市場向け生産がいつそう深化したのである。現在、バ・ザイール州、バンドゥンドン州の平均的農家ではキャッサバ生産量の3割から5割、カタラクト準州に至っては8割近くが販売に回されている。今日キャッサバは、この地域の農民にとって、おそらくは出稼ぎによる収入と並ぶ最大の現金稼得源になったのである。<sup>(75)</sup>

## 結びにかえて

以上、ザイール川河口地域におけるキャッサバ生産の普及とそれが持つ意味の変化について、植民地期以前の時期から跡づけてきた。ここでは、本稿によって明らかになった幾つかの点を整理することで結びに代えたい。

この地域におけるキャッサバの普及は16世紀に遡り、植民地期以前にすでに基礎食糧としての地位を確立していた。したがって、植民地当局によってその普及が強制されたのではなく、アフリカ人農民が自発的にこの作物を選択したのである。選択の理由については、旱魃や蝗害などの天災に強く収量が安定していたことが重要な要因であったと思われる。今日、キャッサバの

急速な普及に際してしばしば説明される「投下労働量の少なさ」という要因は、少なくともこの時期あまり重要な要因とは考えにくい。<sup>(76)</sup>

植民地化以前にもキャッサバの商品としての流通は見られた。そして、キャッサバがとりわけザイール川に沿って普及してゆく過程には、商品としてのキャッサバを扱う伝統的アフリカ人商人の役割が非常に大きかった。しかしながら、キャッサバの本格的な商品化が始まるのは植民地期以降、とりわけ第2次大戦後のことである。戦後の急速な経済成長とキンシャサの拡大に対応して、都市居住アフリカ人の食糧としてキャッサバの市場向け生産が活発化する。この時期は、キンシャサの西に隣接するカタラクト地方が、その市場アクセスの優位性を活かして、そこへの主たるキャッサバ供給地帯となった。ザイール川河口地域におけるキャッサバの市場向け生産は、独立以降キンシャサの肥大化とともにその周辺地域を巻き込んで全面的に展開する。1980年代後半には、農村部におけるキャッサバ生産量の3～5割、カタラクト準州に至っては8割近くが販売に回されている。

キャッサバの消費面における重要性は、植民地化以前にこの地域の基礎食糧となって以降、基本的に変化していない。ただし、植民地期末期から都市に居住するアフリカ人にもパン食が普及し始め、独立以降はそれに加えて輸入米が農村部にも浸透したために、量的な重要性は独立以降若干低下したかもしれない。しかし、それらの輸入は近年の経済危機や社会的混乱の中で急速に減少していると考えられ、少なくともここしばらくは食生活におけるキャッサバへの依存度は再び高まらざるを得ないだろう。この地域は現在のところ、キャッサバに代わる安定的な基礎食糧を持っていないのである。

近年、アフリカ各地でキャッサバの急速な生産増が報告されており、それに対しては楽観論、悲観論取り混ぜて様々な評価が行われている。これらの評価に際しては、それぞれの地域においてキャッサバが導入される過程、その生産拡大過程の背景、等々の固有の要因が検討される必要があるだろう。キャッサバという作物に対する偏見を排し、それが各地域の農業や経済全体に与える影響を客観的に把握するためには、この作物に対する農学的研究の

深化とともに、それに関連する社会経済的研究が充実しなければならない。本稿がその一助となれば幸いである。

〔注〕

- (1) FAO, *Food Balance Sheets, 1979-81 Average*, ローマ, 1984年, 269～270ページ。
- (2) この点については本書第6章も参照のこと。
- (3) Jones, William O., *Manioc in Africa*, スタンフォード, Stanford University Press, 1959年。
- (4) 同上書, 第1章。
- (5) 例えば, Fresco, Louise O., *Cassava in Shifting Cultivation: A Systems Approach to Agricultural Technology Development in Africa*, アムステルダム, Royal Tropical Institute, 1986年, など。
- (6) キャッサバなど根茎類に依存した農業は、穀類に依存した農業に比べて発展段階の低い社会に対応しているという考え方も、キャッサバに依存した農業を劣ったものと見る視角を助長してきた。例えば、メイヤサーは「政治的力は根茎類＝バナナ農業よりも穀類農業という枠組の中の方が、より有利に発達することは明らか」だと述べ、「根茎類＝バナナ農業」と「穀類農業」との差異を発展段階の差異として捉えている（C・メイヤサー著〔川田順造・原口武彦訳〕『家族制共同体の理論—経済人類学の課題—』筑摩書房, 1977年, 50ページ）。
- (7) 中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』岩波書店, 1966年, 181ページ。
- (8) R・メジャフェ著（清水透訳）『ラテンアメリカと奴隷制』岩波書店, 1979年, 21～22ページ。
- (9) Hilton, Anne, *The Kingdom of Kongo*, ロンドン, Clarendon Press, 1985年, 5ページ。
- (10) Pigafetta, Filippo ; Duarte Lopes, *Description du Royaume de Congo et des contrées environnantes*, (W. Balによるフランス語訳), ルーヴァン, 1963年, (オリジナル本の出版は*Relazione del reame di Congo*, ローマ, 1591年), 76ページ。バランディエの引用による。Balandier, Georges, *Daily Life in the Kingdom of Kongo; From the Sixteenth to the Eighteenth Century*, (Helen Weaverによりフランス語から翻訳), ロンドン, George Allen & Unwin, 1968年, 92ページ。
- (11) Balandier同上書では、カプチン派イタリア人キャヴァジの17世紀後半の記述（Cavazzi, Giovanni Antonio de Montecucullo, *Descrizione storica dei tre regni Congo, Matamba e Angola*, 現代版, ティボリ, 1937年, 26ページ

- (原著は *Istorica descrizione degli tre regni Congo, Angola e Matamba*, ボローニャ, 1687年) やコンゴ王国に関する古文書資料 (Cuvelier, Jean ; Louis Jadin, *L'Ancien Congo d'après les archives romaines (1518-1640)*, ブリュッセル, 1954年, 117~118ページ) があげられている。
- (12) この地域にヤムが伝播したのは紀元 0 世紀前後と推定されている (中尾, 前掲書, 58ページ)。
- (13) Balandier, 前掲書, 92ページ。
- (14) 同上書, 94ページ。
- (15) 同上。
- (16) コンゴ王国はおおむね 8 つからなる緩やかな拡大クランの連合体であった。王国では 16 世紀に集権化が進み, 17 世紀後半以降はルアンダのポルトガル植民地からの攻撃を受けて衰退するなかで各クランの自立性が強まった。このように各拡大クランと中央との関係は時代ごとに大きく変化するが, ここではさしあたりヒルトンに従って「州」と訳しておく。また各州の呼称もヒルトンに従った (Hilton, 前掲書, 33~34ページ参照)。
- (17) Balandier, 前掲書, 94~95ページ。
- (18) 同上書, 95ページ。
- (19) Hilton, 前掲書, 79ページ。
- (20) スタンレーの伝記小説には, 彼がエミン・パシャ救出のためにザンジバルで雇った人夫達が, キャッサバの毒抜き法を知らなかったために大量に死亡した話が紹介されている (Farwell, Byron, *The Man Who Presumed; A Biography of Henry M. Stanley*, ロンドン, Henry Holt & Company, 1957年 (川口正吉訳『ブーラ・マタリー探検家スタンレーの生涯』刀江書院, 1959年, 202~203ページ)。
- (21) Jones, 前掲書, 74ページ。
- (22) マココは現在のマレボ・ブル付近, オカンゴはキンシャサ市東部のケンゲ近くに位置する。
- (23) ルアンダの入植地は 1575 年に建設されるが, 17 世紀前半に著しく発展してコンゴ王国を脅かすことになる。
- (24) Hilton, 前掲書, 77ページ。こうした形で交易に関わったポルトガル人およびその混血は「ポンベイロ」(pombeiro) と呼ばれた。
- (25) キャッサバの主たる食用部分はイモであり, かつ葉にも青酸が含まれているためにバッタの被害に遭いにくい。
- (26) かつて農民の日常生活の中で農業労働に向けられる時間がそれほど多くなかったことは, 例えば Nicolai, Henri, *Le Kwilu*, Cemubac 69号, ブリュッセル, Centre scientifique et médical de l'Université Libre de Bruxelles en Afrique

Centrale, 1963年, 243ページ, で主張されている。また, ドゥ・シュリッパによるザンデの研究, ダグラスによるレレの研究でも同様の指摘がある (Schlippé, Pierre de, *Shifting Cultivation in Africa; The Zande System of Agriculture*, ロンドン, Routledge & Kegan Paul, 1956年/Douglas, Mary, "The Environment of the Lele," *Zaire*, 第9巻第8号, 1957年, 801~823ページ)。

- (27) Hilton, 前掲書, 79ページ。
- (28) これ以外の経路によるキャッサバの伝播も当然あったと考えられる。特に, コンゴからガボンに至る沿海地域への伝播経路は当然存在したと考えられ, ガボンではキャッサバのことをマタディ (Matadi—ザイール川河口の都市名) あるいはバコンゴ (Bakongo—コンゴ人の意) と呼んでいるという指摘 (Balandier, 前掲書, 95ページ) からもその点を傍証できる。その他にも, アンゴラのルアンダ付近では植民地期以前からキャッサバ生産が盛んであり, これが東部あるいは南部に伝播した可能性は高い。しかし, 残念ながら筆者はアンゴラのキャッサバ生産に関する史料を入手できず, この点については解明できていない。
- (29) 以下の記述は主に, Curtin, Philip 他, *African History*, エイヴォン, Longman, 1978年, 第14章, によっている。
- (30) 同上書, 426ページ。
- (31) 同上書, 427ページ。
- (32) Farwell, 前掲書, 邦訳103ページ, 196ページなど。
- (33) Jones, 前掲書, 63~64ページ。
- (34) ペースト状に捏ねたキャッサバを熱湯で煮沸し凝固させたもの。この地域でのキャッサバの主たる食べ方のひとつ。武内進一「キンシャサの胃袋を支えるシクワング」(『アジ研ニュース』1991年1・2月号, [特集: 第三世界の外食産業]), 56~58ページ, も参照のこと。
- (35) Shinnie, Margaret, *Ancient African Kingdoms*, ロンドン, Edward Arnold, 1965年(東京大学インクルレコ訳『古代アフリカ王国』理論社, 1968年, 121~126ページ)。
- (36) Jones, 前掲書, 65ページ。
- (37) ジョーンズはバルバの東部に居住するベンバについて, 1933年の蝗害を契機としてキャッサバを受容したと述べている。これもこの伝播経路の延長線上に位置づけられよう。
- (38) Ministère des Colonies, *L'agriculture au Congo belge et au Ruanda-Urundi de 1948 à 1952*, ブリュッセル, 1954年, 45ページ。
- (39) Nicolai, 前掲書, 228ページ。
- (40) Drachoussoff, V., "Essai sur l'agriculture indigène au Bas-Congo," *Bulletin Agricole du Congo Belge* (以下BACBと略する), 第38巻第3号, 1947年9月,

- 474～582ページ、および同誌第38巻第4号、1947年12月、787～880ページ。
- (41) 第3表の数値は大まかであり、農民の食生活のすべてを網羅するものではないことを再度強調しておく。例えば、シコクビエの摂取が全くなかったとは考えにくいし、タンパク源としては昆虫類の利用も重要であったと思われるが本表では無視されている。
- (42) Adriaens, E.-L., "Recherches sur l'alimentation des populations au Kwango," *BACB*, 第42巻第2号, 1951年6月, 227～270ページ, および同誌第42巻第3号, 1951年9月, 473～552ページ。
- (43) 同上論文 475ページ。ただしこの論文では、キャッサバが穀物に代替したことを「退行」だと評価し、この地域の住民の食生活は原始的な狩猟採集民のそれと大差ないと述べている(同上論文, 476ページ)。
- (44) ここには周辺に居住するバテケ (Bateke), バンゴンゴ (Bangongo) およびバヤンシ (Bayansi) に関する調査も含んでいる。
- (45) Jones, 前掲書, 84ページなど。
- (46) パーム産業の形成, 変容については, 武内進一「ベルギー領コンゴにおけるパーム産業の形成過程—ベルギー領コンゴ搾油会社の事業展開と植民地政府の役割—」(『アジア経済』第31巻第5号, 1990年5月) 94～113ページ, を参照のこと。
- (47) "paysannat"とは小農, 農民を意味する名詞"paysan"を集合的に表す単語である。これをあえて意識すれば「小農育成」ということになる。
- (48) ペイザナに関する文献については, 武内進一「ベルギー植民地省農業局発行資料について」(『植民地後期アフリカ経済と非アフリカ人—研究史と文献解題—』アジア経済研究所所内資料No. 63—2, 1989年3月) 101～120ページ, を参照のこと。
- (49) Staner, P., "Les paysannats indigènes du Congo belge et du Ruanda-Urundi," *BACB*, 第46巻第3号, 1955年6月, 474ページの引用による。
- (50) 同上論文, 468ページ。
- (51) 同上論文でも, 「言葉の本来の意味では, レオポルドヴィル州にペイザナはほとんど全く存在しない」と述べられている(522ページ)。
- (52) 植民地期の呼称はレオポルドヴィルだが, 独立以降に関する記述との関連で混乱を防ぐために, 以下本稿では首都名についてはキンジャサで統一する。
- (53) Staner, 前掲論文も, 「この(レオポルドヴィル)州全体において経済状況および伝統的農業技術改善の視点から, 長年普及活動が続けられてきた」と述べている(522ページ)。
- (54) 同上論文, 522～531ページ参照。
- (55) Leplae, Edm., "Les cultures obligatoires dans les pays d'agriculture



- arriérée,” *BACB*, 第20巻第4号, 1929年12月, 474ページ。
- 56) Mulambu, Mvuluya, “Cultures obligatoires et colonisation dans l’ex-Congo belge,” *Les cahiers du CEDAF*, 1976年6-7号, 33ページ。
- 57) Kilby, P., “Manufacturing in Colonial Africa,” P. Duignan, ; L. H. Gann 編, *Colonialism in Africa, vol. 4, The Economics of Colonialism*, ニューヨーク, Cambridge University Press, 1975年, 470~520ページ。
- 58) この時期のベルギー領コンゴ経済の成長に関する研究は少ないが, さしあたり武内進一「キンシャサ周辺農村の土地問題—植民地期労働移動要因の再検討—」(『アジア経済』第29巻第7・8号, 1988年7・8月)32~54ページ, 特に第Ⅲ節を参照。
- 59) 数値は, Pain, Marc, *Kinshasa*, パリ, Edition de l’Orstom, 1984年, 19ページ, による。
- 60) 1959年にキンシャサに居住していたヨーロッパ人人口の正確な統計は入手していない。ただし, 同年のレオポルドヴィル州に居住するヨーロッパ人人口については3万3578人との数字があり (Institut National de Statistique, *Annuaire statistique de la Belgique et du Congo belge, Année 1959*, ブリュッセル, 出版年不明, 531ページ), この数字に1952年の段階でのレオポルドヴィル州居住ヨーロッパ人人口とキンシャサ市在住ヨーロッパ人人口の比率 (2万2225人対1万3275人—Ministère des Colonie, *Aperçu sur l’économie agricole de la Province de Leopoldville*, ブリュッセル, 1955年, 6ページによる) を掛ければ2万56人との値を得る。
- 61) Pain, 前掲書 (53ページ) によれば, 1955年の調査ではキンシャサに移住したレオポルドヴィル州出身者のうち64.6%がカタラクト県出身であった。武内進一「キンシャサ周辺農村の…」も参照のこと。
- 62) 例えば, Vanderyst, Hyac, “Etudes géo-agronomiques congolaises,” *BACB*, 第22巻第2号, 1931年6月, 206ページ/De Saint Moulin, L., “Les essais de modernisation de l’agriculture du Zaïre à l’époque coloniale,” *Zaïre-Afrique*, 第202号, 1986年2月, 93ページ/Merlier, Michel, *Le Congo de la colonisation belge à l’indépendance*, パリ, François Maspero, 1962年, 106ページなど多数。
- 63) “Cataracte”は滝の意である。
- 64) Baeck, L., “Une société rurale en transition: Etude socio-économique de la région de Thysville,” *Zaïre*, 第11巻第2号, 1957年2月, 115~186ページ。
- 65) なおこの表の数値は鉄道便扱いのものを集計したものであり, 手荷物扱いの商品は除外されている。バエクは手荷物扱いの方が量的に重要だろうと推測している。一方, 道路輸送量についてバエクは, 推計すら不可能だと述べている (同上論文, 141ページ)。

- 66) Nicolai, 前掲書, 262, 268ページなど。
- 67) 同上書, 267ページ。リーヴァヴィルを中心とする地域におけるパーム生産の重要性については、武内進一「ベルギー領コンゴにおけるパーム産業の形成過程…」を参照のこと。
- 68) Mouvement Populaire de la Révolution, République du Zaïre, Département de l'Agriculture et du Développement Rural, Service d'Études et Planification, *Région du Bas-Zaïre; Etude régionale pour la planification agricole*, キンシャサ, 1986年, 37～52ページ, による。なお, 500世帯の地域別内訳は以下のとおり。調査は, マタディについては1983年7月, その他の地域については84年10月に行われた。

調査世帯の内訳

	都市部		農村部			計
	ボマ	マタディ	バ・フルーヴ	カタラク	ルカヤ	
調査世帯数	50	100	50	50	50	500
調査世帯総人数	309	783	374	359	344	2,169
成年男子数	77	173	91	80	80	501
成年女子数	80	173	97	92	77	519
15歳以下子供数	152	437	186	187	187	1,149

- 69) この表では, 特定の作物が主としてどの栄養素を供給しているか, に基づいて作物が分類されているために, 例えばキャッサバは全くタンパク質を供給しないと仮定されている。しかし実際には, 確かにキャッサバの単位当たりタンパク質供給量はわずかだが, 摂取量が大きいためにタンパク質供給源としてかなり重要である(例えば, FAO, 前掲書, のザイール, コンゴ, 中央アフリカ共和国などの項を参照)。本表の推計方法について詳細は不明だが, キャッサバに対する依存度が過小評価される可能性があると思われる。
- 70) ここで, バ・フルーヴ準州の米の購入量が他の準州に比べて大きい, これが先の栄養摂取調査におけるバ・フルーヴ準州の米依存度の高さとは何かの関係があるのかについては, 筆者は現在それについて判断するに足る資料を持ち合わせていない。この点の解明については後日を期したい。
- 71) アメリカ政府はザイールに対し, 独立以降一貫してP L 480による食糧援助を続けてきた。例えば, 1989年には2万8000トンの米, 3万6550トンの小麦がP L 480によってザイールに供給されている(République du Zaïre, Département de l'Économie Nationale et de l'Industrie, *Conjoncture Économique; Année 1990*, キンシャサ, 1991年)。
- 72) 植民地期と今日とでは行政区分が若干変化しているために正確な比較はできな

いが、目安として比較を試みる。1984年7月1日現在のセンサスで、バンドゥンドン州およびバ・ザイール州の農村部人口（全人口からバンドゥンドン市、キクウィット市、マタディ市、ボマ準州の人口を差し引いたもの）は512万195人（République du Zaïre, Institut National de la Statistique, *Combien somme-nous; Résultat provisoire*, キンシャサ, 1984年, 29~31ページより算出）。一方、1954年のレオポルドヴィル州における農村部居住人口（統計上、慣習法適用居住地域 [milieu coutumier] として計上される人口）は212万6529人。これを比較すれば、30年間に農村人口は概ね2.4倍増加したことになる。

- (73) Bureau d'Etude et Amenagements Urbains, *Approvisionnement de Kinshasa 1984 et 1985, Apports par voie routière, Essai de synthèse*, キンシャサ, 1986年, 3ページ。ただし, République du Zaïre, Département de l'Agriculture, *Analyse des prix des produits vivriers à Kinshasa pendant la période 1961-1989* (Publication 12), キンシャサ, 1989年, 13ページの引用による。
- (74) その一方で、カタラクト準州のキャッサバの自家消費量は他の地域と比較して極端に低い。販売量の圧倒的な大きさと合わせ、これをどのように解釈するかはきわめて興味深い問題であるが、現在の筆者の力量を超える。カタラクト地方では商業的農業の進展の結果、他地域と比べ農家経営のあり方が変質したと考えられるが、その具体的検討は後日を期したい。
- (75) この地域の農村からの出稼ぎに関する資料はないが、バ・ザイール、バンドゥンドゥの両州が植民地期以降現在に至るまで一貫してキンシャサへの最大の人口排出地域であることを考えれば、出稼ぎ労働者からの送金はこの地域の経済に重要な影響を持っているであろうと推測できる。
- (76) 同様に、今日のキャッサバ生産拡大過程を考える際にも、生産力の問題をはじめとする労働力以外の要因も考慮する必要があるであろう。